

# 新型コロナウイルス禍—今できること—



黒田 直 敬

今この原稿を書いている時点で、新型コロナウイルス（COVID-19）によるパンデミックは、日本ではようやく沈静化の兆しが見られるようになってきました。私の生活している長崎では長崎港に停泊していたクルーズ船での感染事例を除けば、この二か月陽性者は出ていない状況ですが、第二波到来の可能性を考えると予断を許さない状況ではあります。20世紀に入ってから、パンデミックと呼ばれるウイルス感染の大流行は3回あるそうです。いずれもインフルエンザウイルスによるもので、1918年のスペイン風邪、1957年のアジア風邪、1968年の香港風邪と呼ばれています。直近の香港風邪では、日本で1968年秋から翌年春にかけて約13万人が感染し、約1000人が亡くなったとされています。それから、約50年が過ぎ、交通手段や通信手段等のインフラ、生活環境や医療技術も大きく進化しました。また、コロナ禍によりテレワークの利用が増え、人工知能（AI）による技術革新も大きく加速されようとしています。例えば、治療薬開発や診断におけるAIの活用、AIを利用したカメラ映像による群衆人数や密集度の解析、バーチャル警備員による体温検査の試みなどです。

一方自身の生活に目を向けますと、大学での会議や講義に関して、授業実施のあり方は感染状況の変化によってその都度変わってきてはいますが、現時点では対面授業の代わりにWebによるオンライン授業が取り入れられています。日頃使い慣れない技術の習得や生活パターンの激変に戸惑いながらの毎日を過ごしている状況です。これまで定期的であった部局や全学の会議は大きく減り、メール会議が日常的になりました。日本分析化学会九州支部の行事に関しましても、6月の常任幹事会はメール会議となり、非常に残念なことではありますが、分析化学講習会や若手の会の関連行事は今年度の開催を見送る結果となりました。

このように、これまで日常的と認識していたものがそうでは無くなり、戸惑う場面も少なからずありますが、冷静に振り返ると必ずしも悪いことばかりではないことにも気付かされます。「あれだけ頻繁かつ定期的に行われていた会議数は減っても意外に何とかなっているし、本当にすべてが必要だったのだろうか」、「必ずしも移動に時間をかけて全員一同で顔を合わせて対面会議を行わなくても、何とかなるものだな」、「講義のやり方をオンラインに変えることで、新たな改善点が見つかったな」などの感想です。当然、新しいやり方にも負の面は存在し、それを補うための効率化や新しい方法の模索が不可欠になってきます。COVID-19問題は大きな試練を我々に与えましたが、言い換えると新たな機会を与えてくれたとも言えます。この逆境下に少し立ち止まって、今まで惰性に流されて行ってきた色々なことを見直すにはいい機会ではないかと思うこの頃です。

[Naotaka KURODA, 長崎大学, 日本分析化学会九州支部長]